

## 第51回 経営協議会 議事要録

日 時 平成27年1月22日(木) 13時30分～15時05分

場 所 事務局第二会議室

出席者 宮田亮平 学長、馬場 剛 理事、横里幸一 理事  
保科豊巳 美術学部長、澤 和樹 音楽学部長

石田義雄 委員、高階秀爾 委員  
遠山敦子 委員、中村胤夫 委員、福井俊彦 委員

陪 席 監事：梅崎 壽 監事、金井 満 監事

渡邊健二 理事、北郷 悟 理事  
越川倫明 副学長、松下 功 副学長  
三田村有純 留学生センター長 [学長特命 (国際交流担当及び留学生担当)]  
大角欣矢 附属図書館長、関 出 大学美術館長

欠席者 滝 久雄 委員  
岡本美津子 大学院映像研究科長

宮廻正明 社会連携センター長 [学長特命 (社会連携担当)]  
桐山孝司 学長特別補佐 (キャンパス将来構想担当)

○ 審議に先立ち、馬場理事から12月から新たに事務系幹部職員となった国際企画課長の紹介があった。

### 議題

1. 第2期中期目標・中期計画の変更について  
議長から標記のことについて提案があり、馬場理事から資料に基づき説明の後、審議の結果、原案どおり承認された。

### 報告及び連絡事項

1. 平成27年度国立大学法人運営費交付金の概要等について  
馬場理事から、資料に基づき報告があった。
2. 平成25年度に係る業務の実績に関する評価結果について  
馬場理事から、資料に基づき報告があった。

3. 国立大学法人等における余剰金の翌事業年度への繰越に係る承認について  
馬場理事から、資料に基づき報告があった。

4. 東京藝術大学グローバル戦略評価・検証委員会の設置及び開催について  
馬場理事から、資料に基づき報告があった。

5. 平成27年度経営協議会開催日程について  
馬場理事から、資料に基づき報告があった。

6. 「その他(昨今の本学をめぐる諸情勢について)」
  - 澤音楽学部長から、机上資料「早期教育プロジェクト」について報告があった。
  - 大学院映像研究科事務長から机上資料「ドラえもんは、「スーパーグローバル」になれるのか?」について報告があった。
  - 北郷理事から、机上資料「上野「文化の杜」新構想プロジェクト」について報告があった。
  - 保科美術学部長から、机上資料「日本・台湾現代美術の現在と未来」について報告があった。
  - 渡邊理事から、机上資料「スーパーグローバル大学 創成支援 採択校特集」について報告があった。

その他：(ご助言、ご提言等)

学外委員からの主な意見

- 藝大は、古くから海外との交流もあって材料に困らないが、スーパーグローバル大学に採択され、慌てている大学もある。
- 地方の大学にとって、レベルの問題もあるが、10年間で目に見える成果を出すことは難しいのではと考える。
- 各大学とも、海外から日本に来る留学生の数に問題がある。魅力があるにもかかわらず、それが発信できていない。留学生が来くなるような仕組みを作り上げてほしい。
- グローバルというと、とかく海外に目が向くが、もう一度日本の文化を踏まえたうえで、取り組むべきである。
- スーパーグローバルに選ばれた大学は、ローカル大学と提携しながら、もっと幅広い活動を行って教育研究を作り上げていかなければならない。
- 藝大が、地方活性化に果たす役割は多いと考える。地方の文化芸術を活動として外に出していくためには、藝大の手助けが必要と考える。
- 上野「文化の杜」新構想のような話がまとまってくることは大きなことで、促進していくような方向性を打ち出せれば、周辺も力になってくると考える。
- 東京オリンピックに向かって、文化施設の集積している上野をオリンピックと対比しながら、どう見てもらうか。上野をどう演出していくか、どう考えていくかということも併せて、上野単体の問題ではなく、東京の真ん中であって多くの文化集積があるということ、あらためて内外に情報発信していくことを考えてもらいたい。
- 日本は海外から、科学技術と文化の国であり、伝統文化を持ちつつクリエイティブに新しい文化を作り上げ、発信していく国と見られている。そういう能力を持った人材が

実際に海外に出かけて行って何か行くと、その国の人にとってそれが現実のものとなる。発信の時には実際に能力を持った人が出向くということが大切で、そういったシステムが組織的にできると良い。

- 上野「文化の杜」新構想には、期待を寄せている。いろいろな形で応援したいと考えている。
- 早期教育プロジェクトは、たいへん良いことと考えるが、チャンスを与えるだけでなく、その後をどうするかも大切である。
- 藝大のスーパーグローバルには期待している。藝大であれば、何でもできると考えるが、グローバル化を行うセクションが成果を上げれば上げるほど、他の人はそこに任せってしまう。これを注意して全てのセクションが自身のためにグローバル化しなければならない。できないところがあれば、それをサポートしていく、あるいは、コンサルトしていくような流れになれば本物となる。
- 日本の文化には、海外にまだ知られていないものが多くある。それを発信して行くときには藝大の持つ力や卒業生の存在が大きな意味を持つ。これまでも海外で日本文化を発信してきた例はあるが、実施する日本側の役所が文化担当でないためかは分からないが、海外の文化担当諸機関とあまり関係がない状態となっている。例えば会場となる展示施設などをもう少しうまく使用できれば、そこはもっと日本を紹介できる場となり、注目もされる。藝大はいろいろなものを持っているので、新しくできた国際企画課が、外へ打って出ていく際には、海外にすでにあるそれらの諸機関と連絡を取り、うまく利用し、一緒になって行っていく必要があると考える。